

<環境科 班別行動>

## 二班「西宮まち歩き」

担当：2 班 A / 服部・石井・島・村瀬

朝からあいにくの雨。兵庫県南部は夜半より竜巻注意報も発令されているが、範囲は駅周辺のまち歩きなので、注意を払いながら実施することとした。

9 : 3 0 阪神今津駅に集合。参加者 11 名。

今日は駅より、約 1.3 ㎞間を歩きつ、戻りつしながらの西宮ポイント巡り。まずは酒蔵通りをめざし、関連する施設巡りのスタートだ。

1 0 : 0 0 酒蔵を模した今津小学校に辿ると校庭の一角にめざす「六角堂」が凜として佇む。六角堂は、明治 15 年、教育の必要性を感じた地元住民が、当時 8,000 円の建設費の内、5,200 円を出し合って建てたもの（米 1 表 8 円）とか。外観はちょっと洋風なしゃれた建物。足を一步踏み入れると、懐かしい昔の趣ある学校が存在していた。中ももちろん重厚な感じ。展示資料から当時の面影や、学校移設の経緯も読み取れる。何と六角堂は、戦禍やあの阪神淡路大震災を、高速道路 IC 建設などを逃れて、残っていた。また管理も、小学校→公民館→幼稚園→小学校と変わり、数奇な運命を辿る。震災後に取り壊されることになったが、住民の熱意で守られて現在に到っている。

近代化遺産としては、手を加えすぎの為に登録不可能との判断だが、歴史の生き証人として存在している意義は大きいと思った。



1 1 : 0 0 阪神電車添いの「松本和ろうそく」様に伺う。

県内ではここだけとなった「和ろうそく」造りを見学する。

本来ならばお盆に向け、大忙しの時期だ。無理を承知でお引き受け戴く。

松本様では、下記、①～⑥までの工程を二日間で行っているとのこと。

(①芯さし・②芯締め・③下掛け(したがけ)・④上掛け(うわがけ)・⑤頭切り・⑥尻切り)

この④上掛け作業(蠟燭を溶かしたものを一本ずつ丁寧に塗りつける作業)を見学後、芯だし作業を全員で体験させて頂く。

やさしそうに見えるが、中々上手くゆかずに

私は二度チャレンジさせて頂く。

二階では、和ろうそくの絵付け作業が行われており、季節のアサガオやハスを描いておられた。

夏は生花が傷みやすく、冬場は生花の入手が厳しい。

とのことで、生花に代わるものとして、絵ろうそくが利用されているとのこと。



店頭での展示品は、どれも素敵な芸術作品で灯りをともすことなど考えられない。  
(本当は灯りをともす必要なく、置いておくだけで良いのだとか。)

別の作業場では、糠蠟づくりを見学。

雲仙普賢岳の噴火により、燗の主産地である長崎のハゼは全滅し、比較的安定して入手可能な糠を用いた糠ろうそくの型作りが行われていた。

仏教伝来と共にやってきた蠟燭（当時は蜜蠟）づくりに触れ、不思議と心が穏やかになれた。



12:30 コープ店にて昼食を済ませて、大関関連施設などを横目に、「今津灯台」を目ざした。

灯台一帯では、将来やって来るであろう、東南海地震に備えた防災工事が進捗中。水門やこの今津灯台も移設予定とか。重機などが稼働中、その狭間で現存する日本最古の灯台は、私設（大関酒造所蔵）で、いまなお健在でした。

多分、最後になるであろう、水たまりに映る「逆さ今津灯台」の一期一会に感動。



13:00 関寿庵（大関のショップ）に立ち寄り、ここでは試飲や試食を楽しみ、お土産を買い求めた。



移動途中、「うん…？ここさっきも通ったような…？」「そうや。三度目やで！」  
そうなのです。先方様のご都合などで、1.3 時間を行きつつ戻りつつ、している  
のです。

途中、何本かのネジバナ（別名 モジズリ）を歩道脇で確認。  
芝生が大好きなネジバナが何故ここに？  
ニワウルシ/シンジュ（別名 神樹）の実生でびっしりの  
歩道脇の花壇。他の植物が入り込む余地なし。原因は何か？  
…等どこでも課題はびっしりで、楽しめ、学べる場となる。



14:00 最後は「樽商」様の工場見学です。  
場内所狭しと、懐かしい樽たちが出迎えておりました。  
酒造り西宮に根ざした「樽商」様も、時代と共に用途が変わり、  
ネットなどを活用した時代に沿った販路を開拓しておられました。  
樽づくりという技術が消えてゆくのでは…と心配しましたが、  
何と二階で作業しているのは、お若いお嬢様です。  
一同驚きましたが、ともあれしっかりお父様の技術を伝承されておりました。  
エールを贈りながら、作業を拝見。



長時間にわたり、樽にかかわるいろんなお話をお聞きでき、貴重な時間が持てた  
一日でした。

お忙しい中、貴重な時間を割いて下さいましたみなさまに、感謝申し上げます。  
帰り際には、すっかり雨も上がっており、流れ解散に。

本日の西宮まち歩きは総歩数約 10,000 歩。お疲れ様でした。

以上。(文責/村瀬)